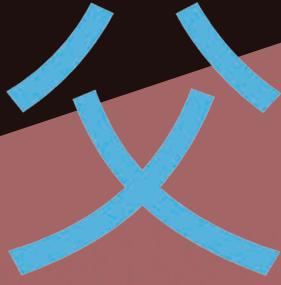


Le Père 父



コメディ
ある父を巡る哀しい喜劇

その知られざる魅力について



©Katsu Nagaishi

ストレートプレイ
今、最も観るべきフランス発演劇、名古屋駅“ウインクあいち”にて上演!

Report

稽古場緊急レポート!

取材・文=藤本真由(舞台評論家)

笑いと絶望の中にある共感。
スリリングな演劇体験と、
2012年にフランスで初演され、ロンドン・エストエンドやニューヨーク・ブロードウェイでも好評を博してきた『Le Père 父』。フランス初演も手がけたラディスラス・ショラーの演出によって、このほど日本初演が実現する。東京公演初日まで約半月となった日の稽古場で、前半部分の通し稽古を観た。80歳のアンドレ(橋爪功)は老化につき記憶がうすれしていく症状にあるが、本人はそのことを自覚していない。憂慮する娘アンヌ(若村麻由美)に対し、意図固な態度をとつばかりだ。そして、混濁するアンドレの記憶は、アンドレ自身にだけでなく、アンヌやその恋人ピエール(今井朋彦)、看護婦のローラ(太田緑ロランヌ)にも多く困惑を及ぼしてゆき。今、目の前にいるこの人が、誰だかわからない。自分がどこにいるのか、わからない。起きた出来事がいつのことだったのか、遠い過去なのか近い過去なのか、わからない。そんなアンドレの困惑を、観客は彼の視点で追うこととなっていく。例えば、アンドレにとっては見知らぬ女(壮一帆)が登場し、娘のアンヌであるとして彼に接したり、見知らぬ男(吉見一豊)がピエールであると名乗ったり。つまり、同じ人物を異なる役者が演じることによって、アンドレ自身の困惑を観客がそのまま体感していくという、演劇的にスリリングな体験が待っている。そんな体験の導き手として、アンドレを演じる橋爪功がすばらしい。乾いたユーモアがあり、記憶の混濁による食い違いのやりとりなど、笑いの要素への目配りも充分。その一方で、困惑による絶望の表情や、その絶望がもたらす激昂の表現など、目を潤ませるものがある。アンヌ役の若村麻由美的演技にも、父を深く思いやりながらも報われないさみしさ、いら立ちがじみ、共感を誘う。どこにでもいるようなチャーミングな男性が、老い故に立ち向かわざるを得ない困難。その姿から、観客が感じ取れるものは決して少なくない。

3/9 [SAT]・10 [SUN] 「Le Père 父」

◎出演／橋爪功、若村麻由美、壮一帆、太田緑ロランヌ、吉見一豊、今井朋彦

■会場／ウインクあいち(名古屋駅・ミッドランドスクエア東隣) ■開演／3月9日(土)18:00 3月10日(日)14:00

■料金(税込)／全席指定 ¥8,000 ■お問合せ／中京テレビ事業 TEL.052-588-4477(土・日・祝休業) ※未就学児入場不可

フランス演劇界の才能が紡ぐヒューマンミステリーの傑作!

フランス演劇賞の最高位、モリエール賞の最優秀脚本賞を受賞したフロリアン・ゼレールの最高傑作「父」。ミステリアスなストーリー展開を軸に、キャスティング、美術、全てが揃った作品だ。ゼレールは今やフランスを代表する文学者で、多数の小説・戯曲を書き下ろしている。そのゼレールの目に留まったのがラディスラス・ショラー、「父」フランス初演の演出家である。彼もまたこの作品での成功を機に才能が開花し、2018年には再びゼレール作品「息子」の演出でタッグを組んだ。

【作】フロリアン・ゼレール



Photo by Laurent Hinri

【演出】ラディスラス・ショラー



Photo by Celine NIESZAWER

【美術】エマニュエル・ロワ



まるでSF!? 観客は主人公の視点で物語を体験していく!

物語は老化現象で記憶が薄れしていく父アンドレ(橋爪)の頭の中を旅するように進んでいく。時間軸が錯綜したり、意識が混乱したりするが、それは彼の頭の中で実際に起こっていること。ついさっきの会話が実は数年前の出来事だったり、初対面だと思っている看護婦は以前から世話をしてくれていたり…。そんなSF的な世界を観客は体験することになる。その世界觀を具現化するフランスの気鋭芸術家エマニュエル・ロワの斬新でアーティスティックな舞台美術にも注目したい。

シニカルで悲しくおかしい、極上のフレンチ・コメディ!

「老い」という誰にとっても身近な題材を、フランス人スタッフならではの皮肉とユーモアを交えて描く「父」。自分自身の信じる記憶とかけ離れた現実。それに困惑しながらも、頑固者の父の振る舞いはどこかユーモラス。その父の変化に困惑する娘。記憶の混乱は自己認識の消失という残酷な現実を招くが、この深刻なテーマを斬新な手法で喜劇(コメディ)として見事に昇華した。

Cast

この新機軸の舞台を、
名優と実力派俳優が演じ切る!

この大傑作を日本で迎え入れる俳優陣も盤石だ。父 アンドレには名優 橋爪功。様々な感情表現を要するこの役に、持ち前の多彩な表情、演技力で挑む。娘 アンヌ役の若村麻由美は最近も「チルドレン」('18年)、「ザ・空気」「子午線の祀り」(共に'17年)と話題作に出演し作品に貢献している。この二人を中心に、元宝塚歌劇団雪組トップスターの壮一帆、NODA・MAPの「表に出ろいっ!」で中村勘三郎と野田秀樹の娘役を演じ、その後多くの舞台経験を積む太田緑ロランヌ、文学座内外で数々の秀作に出演し、受賞多数の演技派である今井朋彦、橋爪が代表を務める演劇集団円その他で活躍する吉見一豊と実力派俳優が揃った。



©Katsu Nagaishi

橋爪 功 × 若村 麻由美 SPECIAL INTERVIEW

演出家L・ショラー氏との創作の時間をどのように感じていますか?

橋爪: ショラーさんは暖かくて優しい演出家で、俳優の意見にもよく耳を傾けてくれる。少しきらいへんなことをしても面白がってくれて、どうやら僕のことは気に入ってくれたんじゃないかな、と自惚れています(笑)。戯曲に縛られず、自由に発想を膨らませられる彼のスタイルは非常に発見が多く、充実したクリエイションを重ねています。

若村: ラッドさんはとても繊細で緻密な演出をされる方。戯曲を深く読み込み、ご自身の解釈から立ち上がるイメージを的確に伝えてくださる。「老い」が大きなテーマとなる作品ですが、ラッドさんの演出プランはそこから、「人間とは、生きるとは?」という大きな世界觀にまで広げ、多くのことを考えさせてくれます。

演じる役についてのお考え方をお聞かせください。

若村: アンヌは、頼もしく厳格だった父が子どもに返っていく現実に苛まれ、さらには愛する人と父親との間に板挟みになり苦悩している。女性が人生で直面する葛藤を体现するキャラクターで、演じるために大きなエネルギーが必要です。ヘトヘトになった時は、橋爪さんのチャーミングさでチャージさせていただいている(笑)。

橋爪: アンドレは老いてなお情熱や感情の枯れない男。場面によっては誰よりも頭が回り、不安に飲み込まれそうになりながらも、シーンが変わればそれすら忘れたかのように立ち直り、

最後まで闇いをやめようとはしない。劇中“なかなかの性格”と描写される彼の厄介さとチャーミング一面、その両方を思い切りよく演じられたいいな、と思っています。

最後にお客様へのメッセージをお願い致します。

若村: 主人公・アンドレに見えていた人と世界、その不条理さをミステリーでも読むように、スリリングに体験できる作品です。1度でも勿論お楽しみいただけますが、2度以上観ていただけたなら謎解きの楽しみも味わえるはず。シリアルな題材ですが柔らかな気持ちでご覧いただき、笑い、涙していただけたらと思っています。

橋爪: この年で「老い」を演じるのはあまり気持ちのいいものではありませんが(笑)、「老い衰えた男の悲劇」に留まらず、年を経た人間なら誰もが体験するであろう奇妙で滑稽な状況を活写する作品だと思います。誰が正常で、誰が正しく振る舞っているのか、二転三転するドラマのスリルを存分に体感していただければ幸いです。

©Text/SORA ONOE